フィルム・コメンタリー 9月16日号

ディレクターズ・カンパニーからアルゴ・プロジェクトまで①

このところ石井隆の作品、監督デヴュウ作『天使のはらわた 赤い眩暈』(1985) から『ヌードの夜/ 愛は惜しみなく奪う』(2010) あたりまで見る機会があり、1980年代からの日本映画界の流れを再発見すべく学習しようとしたところ、映画史家の伊藤彰彦氏（1960~ ）の「なぜ80年代映画は私たちを熱狂させたのか」という著書（2024年4月刊行）に出会い一層その気持ちを強くしました。伊藤氏については、これまで「映画の奈落　完結編　北陸代理戦争事件」に大いに敬意を表していただけに期待を込めて読み、その期待が十分叶えられるものでした。そこで、1980年代初頭の日本の映画界を見渡したとき、新たな動きとして目立つ存在があります。一つは、「ディレクターズ・カンパニー」という若手映画監督が集結して設立された制作会社であり、もう一つは日活のプロデューサーたちが組織した「ニュー・センチュリー・プロデューサーズ」です。そして1980年代後期に設立された「アルゴ・プロジェクト』（現「アルゴ・ピクチャーズ」）です。こうした動きを捉えていくことは、私的に1980年代以降の日本映画史上重要に思えてなりません。そのとば口として石井隆から話を進めていきたいと思います。

石井隆氏（1946~2022）は、劇画漫画家として1970年にデヴューし、「天使のはらわた」（1997）が大ヒットし、1978年から日活ロマンポルノ作品としてシリーズ化されます。このシリーズは1994年まで全六作あり、二作目の『天使のはらわた　赤い教室』（1979　曽根中生監督）から脚本を担当します。三作目（田中登監督）、四作目も脚本を担当し、五作目の『天使のはらわた　赤い眩暈』（1988）で初監督し、シリーズ最終作『天使のはらわた 赤い閃光』（1994）の監督も務めます。『天使のはらわた』シリーズについての概要は、別表1. を参照下さい。このシリーズの最後の作品『天使のはらわた赤い閃光』（1994）については、今は亡きシナリオライターの野沢尚（1960~2004）の遺したブログの文章があり（日付は2009年10月6日とあり）、これに尽きるような気がします。この作品は特に『死んでもいい』（1992）『ヌードの夜』（1993）『夜がまた来る』（1994）に挟まった時期に製作されただけに、ストーリーの破綻的状況は残念以上のものがあり、映画作家としての石井隆の気持ちの昂りが逆効果になってしまったと判断するところです。野沢尚は、「生と死が隣り合わせのセックスを描かず、映画はBスリラーサスペンスの枠内に収斂してしまった」と述べ、「邪推かもしれないが」と断った上で、「ビデオ発売を前提に企画され」当時のレンタルビデオの顧客層に適した「裸とお手軽なサスペンスが同居するB級スリラーだったかもしれない」とし、そして「そのために日本映画界の残り少ない財産の一つである『名美と村木』が持ち出されたとすれば、ちょっと悲しい、いやそうは信じたくない」と締めくくられています。石井隆が生み出した「名美と村木」というキャラクターこそ、映画の上では1970年代後期に誕生し、『天使のはらわた』シリーズのみならず、石井隆の1993年からの三部作『死んでもいい』『ヌードの夜』『夜がまた来る』で「不運であっても不幸ではない」名美という女性を「ファム・ファタル」として描き、彼女に出遭ったばかりに運面を狂わす男を象徴する一対のキャラクターはあまりにも強烈であり、あまりにも危険です。

石井隆については、一旦ここまでで留め後述することにします。1971年という年は日本映画界にとって激動の年といっていいでしょう。五社協定という1953年以来の旧制度の崩壊はあったものの、大映の倒産や黒澤明の自殺未遂事件が起こり、東宝での製作本数の大幅減少、日活のロマンポルノへの路線変更といった各

社のサヴァイバル戦略が展開されました。佐藤忠男氏は日活について、「1960年代の映画観客の急激な減少の中で、映画会社の中で比較的弱体だった会社からやっぱり潰れてれていきました（中略）でも日活がそのときに労働組合を中心に会社に居座って再建しちゃったというのは、これはやっぱり驚くべき事件でしたね。もう日活は終わったんだとばっかり思っていたんだけれど（中略）ロマンポルノ路線というのも初めは誰も期待してなかったんですよ、悪いけど。まあ仕方がないのかと思ってたけれども、これが芸術的に高い評価を得る作品が続々と現れるようになったときはやっぱり驚いたですね。高い評価を得る作品が現れてきた。私も誉めたんですけれども、私だけじゃないですけどね。10人ぐらいの批評家が誉めたんですね。『ポルノでこういう行き方があるのか』と本当に驚いたんですね。神代辰巳なんてね、それまであんまり無視されていた監督なんだけど、もう水を得た魚のように、これが本当の人間の姿だということを描き始めて」と評しています。また、「報知新聞」1974年2月18日付には「日活ポルノ路線の唯一の"功"は神代辰巳の才能を開花させたこと」と書かれています。"ゴダールの物マネ"と言われた時期から、神代が独自の"映像言語"をつかんだのはポルノに巡り合ってからと言われます。（続く）

別表1)『天使のはらわた』の軌跡

	タイトル	製作	配給	公開	監督	製作	企画	脚本	名美	村木
1	『女高生 天使のはらわた』	日活	にっかつ	1978	曽根中生	海野義幸	成田尚哉	深水龍作 池田敏春	大谷麻知子	深水三章
2	『天使のはらわた 赤い教室』	にっかつ	にっかつ	1979	曽根中生	海野義幸	成田尚哉	石井隆 曽根中生	水原ゆうき	蟹江敬三
3	『天使のはらわた 名美』	にっかつ	にっかつ	1979	田中登	結城良熙	成田尚哉	石井隆	鹿沼えり	地井武雄
4	『天使のはらわた 赤い淫画』	にっかつ	にっかつ	1981	池田敏春	結城良熙	成田尚哉	石井隆	泉じゅん	阿部雅彦
5	『天使のはらわた 赤い眩暈」	ニュー・センチュリー・プロデューサーズ にっかつ	にっかつ	1988	石井隆	海野義幸 成田尚哉		石井隆	桂木麻也子	竹中直人
6	『天使のはらわた 赤い閃光』	ビデオ・チャンプ キングレコード テレビ東京	アルゴ・ピクチャーズ	1994	石井隆	酒井俊博 池田頌夫 小林尚武 プロデューサー 新津岳人		石井隆	川上麻衣子	根津甚八

別表2)「名美と村木」のキャラクターの登場する作品

	タイトル	製作	配給	公開	監督	製作	企画	脚本	名美	村木
1	『ラブホテル』	ディレクターズ・カンパニー	にっかつ	1985	相米慎二	海野義幸	成田尚哉 進藤貴美男	石井隆	速水典子	寺田農
2	『死霊の罠』	ディレクターズ・カンパニー JHV	ジョイパックフィルム	1988	池田敏春	升水惟雄 P. 神野智 大塚未知雄	渡辺敦	石井隆	小野みゆき	本間優二 （大輔）
3	『死んでもいい』	アルゴプロジェクト サントリー	アルゴプロジェクト	1992	石井隆	伊地智啓 プロデューサー 榎本靖	企画協力 佐々木志郎 宮坂進	石井隆	大竹しのぶ	永瀬正敏 （信）

4	『ヌードの夜』	ニュー・センチュリー・プロデューサーズ サントリー	ヘラルド・エース 日本ヘラルド	1993	石井隆	稲見宗孝 岡田裕 プロデューサー 成田尚哉 新津岳人		石井隆	余貴美子	竹中直人
5	『ちぎれた愛の殺人』	パイオニアLDC作品	東京テアトル パイオニアLDC	1993	池田敏春	真木太朗 プロデューサー 半沢浩 山本文夫	渡辺敦	石井隆	余貴美子	佐野史郎
6	「夜がまた来る』	ビデオ・チャンプ キングレコード テレビ東京	アルゴ・ピキチャーズ	1994	石井隆	酒井俊博 池口頌夫 小林尚武 プロデューサー 新津岳人		石井隆	夏川結衣	根津甚八
7	『ヌードの夜/愛は惜しみなく奪う』	製作委員会（角川映画+クロックワークス+ファムファタル）（制作プロファムファタル）	クロックワークス	2010	石井隆			石井隆	佐藤寛子（れん・多絵）	竹中直人